

## 長期宿泊体験活動検討委員会 第6回 議事要旨

○日 時：令和2年11月5日（木）午後3時～午後4時45分

○場 所：教育委員会室

○参加者：委員長、委員11名、事務局3名 計14名

### 1 開会

- ・資料の確認

### 2 教育委員会挨拶

- ・様々な事案を検討しながらここまで来た。今回事前に中間まとめ（案）を送らせていただいた。委員の皆様にご意見をいただくとともに市民の皆様にもご意見をいただきたいと思っている。限られた時間の中だが、中間まとめとして一つにまとめていきたいので、忌憚ないご意見をいただきたい。

### 3 議事

（委員長）

- ・今回の検討委員会では、今後の方向性についてと中間まとめ、この二つの柱を中心に協議をしていきたい。
- ・まずは事務局より、武蔵野市長期宿泊体験活動の今後の方向性について説明いただきたい。

（事務局）説明

（委員長）

- ・事務局から新たに付け加えたことや修正したことなどを含めて説明があったが、この説明について何か質問等あればお話いただきたい。

（委員A）

- ・前回協議の内容について中学校校長会では、2点ほど意見が出た。
- ・1点目は、小学校のセカンドスクールでやったことを基軸に中学校セカンドスクールを見直すという話があったが、中学校の場合は、複数の小学校から入学してくる。その複数の学校が小学校第5学年でやったことが同じであれば問題ないがそうではない。そのため、「参考に」という言葉に変えてほしい。「基軸」にすると中学校として縛りが出してしまうという意見があった。

- ・2点目が、各学年の発達段階、当該学年に相応しい活動の例として「キャリア教育を踏まえた職業観の育成に関する活動等」が挙げられている件について。ファーストスクールではできないことをするセカンドスクール。ファーストスクールの中でキャリア教育をしているので、わざわざキャリア教育という言葉を出す必要があるのかという意見が出た。例えば、キャリア教育ではない言葉で、「農作業体験を通して食糧生産の大切さを学ぶ」とか「現地の方との交流を通して持続可能な人間関係の構築や産業の在り方について学ぶ」といった表現にならないだろうか。キャリア教育という言葉は違和感があるという意見がでた。

(委員B)

- ・各学年の発達段階、当該学年に相応しい活動についての例というのは、例としてそれぞれの学年の要素をピックアップしたものである。中間まとめでいうと8ページの2つ目「各学年において実施する体験活動の系統性や発展性について」にあたる部分。例示を示すと誤解等も生じるので、このページでは削除している。中学校長会で出た意見については、中間まとめの該当箇所にしっかり盛り込んでいきたい。

(委員A)

- ・キャリア教育はファーストスクールでしっかりやっている。セカンドスクールというのはファーストスクールでできないことをやるところに主旨があるので、言い方を変えてほしいという意見をいただいた。

(委員B)

- ・その点については前回もご意見いただいたことなので、検討していきたい。
- ・今回の委員会の中で系統性を考えたときに、まずは第5学年のセカンドスクールから協議したので、「小学校第5学年で実施する長期宿泊体験活動の内容・方法を基軸にして」中学校1学年での内容・方法を見直し設定すると言ったが、必ずしも各中学校で上がってくる複数の小学校のセカンドスクールの内容を基軸にして作らないといけないという意味ではない。ただ、それでも誤解が生じるようであれば、ここについて言葉を改めていきたい。

(委員C)

- ・小学校校長会の意見について。活動自体の安全面についての不安の声が挙がった。熊やスズメバチが出るので心配だという意見があった。また、6泊7日は絶対に必要だという意見もあり、宿泊数は校長会の中でも意見の分かれるところであった。

(委員長)

- ・小学校及び中学校の校長会で出た意見というのをお伝えいただいた。次に皆様からご意見があればお話いただきたい。

(委員D)

- ・日数について、小学校第5学年のセカンドスクールを教員の働き方改革を踏まえて1泊減とするとあるが、やはり6泊7日で残してほしい。第二小学校の場合は、今7泊8日で行っているの、これが5泊6日になると2泊減になってしまう。これを現状から1泊減とするのか、それとも一律に5泊6日にするのか教えていただきたい。第二小学校は行先が遠いので、他校より1泊多くなっているはずなので、2泊減になってしまうと場所から変えないといけないのではないかと。また、先生には申し訳ないが、余裕をもったスケジュールで長期の宿泊を実現するために今まで通り6泊7日続けてほしい。

(事務局)

- ・既に第二小学校は今年の日程から6泊7日に変更しているので、1泊減になると他校と同様に5泊6日になる。

(委員B)

- ・新幹線がない状態で利賀村に行っていたので、移動時間に1日かかっていた。ただ、北陸新幹線ができたことで移動時間が短くなった。令和2年度からは6泊7日の計画としたが、今年中止となってしまった。

(委員D)

- ・事情は分かった。でも、1泊減はしないしてほしいと思う。

(委員B)

- ・泊数については先生方にも伺いたい。一応みなさんにシミュレーション等出していたでいて検討した際に、1泊減ということで着地したかと思う。ただ、前回の検討委員会でも先生方や保護者の方から6泊7日という意見が出たので、そこはしっかりと考えていきたいと思う。

(委員長)

- ・中学校セカンドスクールについては後程検討するとして、プレセカンドスクールについては2泊3日ということで落ち着いたと思うが、小学校セカンドスクールについては振れ幅が大きい。4泊でもできるのではないかと意見もあれば6泊という意見もあり様々だと思うが、まとめにあたって皆さんからご意見あればいただきたい。

(委員E)

- ・小学校セカンドスクールについて、5泊6日とされているが、基本的には私はこれに反対。6泊7日での実施を続けていただきたい。今回欠席の委員Jにも確認をしたが、基本的には同じ意見である。現在行っているものをやっていくには6泊7日が必要。5泊バージョンでのシミュレーションを作ってみたが、実際のところ、似たような活動を減らしてみたくらいで、十分吟味したものではないし、この会議の中でも十分な話ができていないと思う。働き方改革の問題があるが、どうしても1泊減しなくてはいけないのか、議論を重ね検討していきたい。例えば、昔やっていたらしいが、セカンドスクールの途中で担任の教員も交代するという方法もある。途中で教員が交代するというのは電車の問題もあるし、交通費など予算がかかるという問題もあるが、そういったことも考えられると思う。意見としては出ていたが、この会議で5泊という結論には達していなかったのではないかと思う。
- ・4年生のプレセカンドスクールでの例として「現地の小学生との交流」が挙げられている。「現地の小学生との交流」については、4年生で初めて行く宿泊学習で現地の小学生と交流する時間を確保し、また事前学習をするというのは非常に負担が大きいのではないか。あくまで参考例というのは分かっているが、半数くらいの学校が行っているのであれば例示として載せてあるのも分かるが、まだ実際には少ないのではないか。

(委員長)

- ・今どれくらいの小学校で実施しているのか事務局で分かれば教えていただきたい。

(事務局)

- ・井之頭小学校と関前南小学校が取り組んでいる。

(委員C)

- ・5年生のセカンドスクールは結構取り組んでいる。

(事務局)

- ・今後の方向性を決める大事な部分なので、一つ一つ検討していくというのもとても大事だと思う。実施校の先生にもヒアリングさせていただいて、とても交流が有意義と伺っていたこともあり、記載した。実施している学校数に関係なく、あくまで例示として記載している。現地の子どもたちに教えてもらいながら交流したり、遊んだりするのがとてもよいというお話を伺った。そういったことがあってもよいという例示である。現在やっていない活動例も記載し、新しいことに取り組んでいく姿勢も必要かと思う。現地の小学生との交流というのは、現在実施している学校もあるので、そこまで新しい取組

ではないと考えている。

(委員F)

- ・私も5泊6日は反対で4泊5日にしてほしい。3泊4日にしてほしいとはあまり思わない。先ほど校長会で検討したという話があったが、他市から赴任した校長からいうと、非常に怖い活動だと思う。第6学年で日光に行っているが、たくさん学校が行っているので、情報もたくさん入ってくる。セカンドスクールは、学校ごとに場所を選定していることが魅力ではあるけれども、現地の安全に関する情報などの収集が難しいこともある。教員がスズメバチに刺されたこともある。生徒じゃなくて良かったが、6泊7日というのは非常に厳しいと思う。その状況に教員が耐えうるか、学校として持続可能かどうかを考えると厳しい日程ではないか。働き方改革というと陳腐な言葉になってしまうが、どれだけリスクを冒しているかということを私は強調したい。また、6泊7日で継続した場合に、教育課程の問題については解決するのか。新しい学習指導要領に沿った形で、今までのように総合的な学習の時間を便利に使うのではなくて、教科でやるとなると、極めて時数は厳しいと思う。それであれば教科の時間を足さないといけない。それを考えると私は、学校行事としてセカンドスクールを行うのがふさわしいと思う。今年から夏休みが短縮されており、それはセカンドスクールとは関係なく短くなっているため、それに加えて授業時数の上積みが必要になる。そういったことも含めて本当に持続可能なのかというのを考えてほしい。また、ここで多数決で決まることではないので、本当は私は4泊5日がよいが、教育委員会が中間まとめ(案)として5泊6日を出してきているので、この形で考えていこうと思っている。しかし、これでまた6泊7日にひっくり返るのであれば、この検討委員会は何だったのかと思う。

(委員長)

- ・今お話があったように多数決で決めるのではなくて、セカンドスクールの主旨にあった泊数がきちんと取れるように考えていく必要がある。子どもたちのためにねらいを達成するためには何泊必要かを考えていく必要があると思う。

(副委員長)

- ・様々なご意見いただいた。以前子どもたちがセカンドスクールに行くと困難を経験しそれを乗り越えていくにはどれだけの泊数が必要かという議論をした。そのためには今までの議論では、4泊じゃちょっと厳しい。では5泊ではどうなのかということだった。長く居れば子どもたちは生活において学ぶ部分もあると思う。だが、最低限何泊必要なのかということについては、5泊6日で大体落ち着いたのではないかと。
- ・先ほど委員Fから課題のご提案があったが、この検討委員会は非常に前向きな方々が多いので、理想的な泊数として6泊7日というご意見なのかなと思う。それに加えて

持続可能性や先生方の負担というのも考慮して5泊6日ということで提案した。それでも、5泊ではできない、6泊じゃなければできない理由があるのであれば、この委員会で明確に示していかなければならないと思う。

(委員G)

- ・セカンドスクールは特有の意味があると思う。修学旅行に行ったから京都に住みたいとは思わないし、移動教室で日光に行ったから日光に住みたいとは思わないが、セカンドスクールは行くと現地に住みたいと思うようになる子どもたちもいる。セカンドスクールは、都会の子が田舎に行って衝撃を受けるイベントで、人生観を変えるような、価値観を変えるような機会だと思う。それを考えると、1個1個のカリキュラムを達成するのではなくて、できるだけほったらかしにした方がいいのではないか。それにはできるだけ時間をかけた方が良く、3泊4日でカリキュラムをこなすだけではなく、ある程度の時間が必要ではないか。5泊6日がいいのか6泊7日がいいのかというのは分からないが、修学旅行とは違う長期宿泊のよさがあると思う。

(委員長)

- ・長期宿泊ということで、新学習指導要領では、「一定期間（例えば1週間（5日間）程度）にわたって行うことが望まれる」と示されている。この「程度」という言葉が非常に微妙な言葉で、武蔵野市としてどうしていくのか。ある学校は5泊6日で、ある学校では6泊7日でやるのか。予算の関係もあるので、ある程度の方針を固めていく必要があると思う。

(委員B)

- ・1週間程度（5日程度）というのが非常に微妙な書き方で、1週間と考えると7日間だがカッコ書きで5日程度とある。新学習指導要領というのは、北海道から沖縄まで全部の学校で、標準として長期宿泊が必要であろうということなので、土日を除いた5日間程度という考え方をしているのではないかと思う。ただ、この長期宿泊が学習指導要領に書かれるようになったのは、武蔵野市の実践があってこそ始まったことだと思う。あえてそこにこだわる必要性はないだろう。武蔵野市は元々独自に進めてきた。そうすると、4泊5日よりもう少し長く、ただ6泊7日でやっている中で様々な課題が出ているので、5泊6日にできればと思う。
- ・先ほど、働き方改革という言葉にすると逆に陳腐になってしまうという意見をいただいた。また、5泊6日での実施についてシミュレーションをしたが、まだ検討が十分でないのではないかとのご意見もいただいたが、その課題についても事務局としては見直していきたい。まずは5泊6日でやってみて、やっていく過程で課題等も出てくると思うので、そこでまた泊数の見直しをすることも考えられる。そういったことも踏まえて、

折り合いをつける形で、武蔵野市のやってきた実績と矜持を踏まえ、5泊6日で考えていけないだろうか。

(委員長)

- ・1泊減の理由もちゃんと伝わるように書き直しながら進めていきたい。例えば、人間関係の問題やホームシックなどを乗り越えて、仲間と協調して生活することの大切さを実感できるようにしていくには、最低5泊くらいは必要という方向で進めていきたいと思う。そんな形で進めてよいだろうか。
- ・小中校長会で出たご意見で文言の修正をする部分も見えてきたし、現地の小学校との交流は小学校第4学年だけではなくて、他の学年でもこんなことができるという例示であった。ただ、初めての宿泊学習という中で、小学生との交流を例として入れるのかどうかということは検討していきたい。

(委員C)

- ・現地の小学校との交流というのは、こちらが望んでもなかなか実現できるものではない。飯山など同じ地域にいくつもの学校が行ってるようなところは、受け手がないだろう。受けてくれる学校との出会いと、子どもたちの伸ばしたいと思っている部分など様々な条件がそろわないと難しい。これをやらなければいけないとなると、セカンドスクール本来の目的が達成できなくなってしまうかもしれないので、例示にそんなにこだわらないことが必要。それぞれの実施地に合わせて進めていければよいのであえて書かなくてもよいかと思う。学校との交流は意外とハードルが高い。

(委員長)

- ・そういったご意見が出たがいかがだろうか。

(委員B)

- ・所属校や武蔵野市と異なる場所での出会いということで、以前委員の皆様にご意見をいただいたので、特色ある活動として例示に加えた。地域の方や宿の方との出会いという意味でもあるので、実施地の特色に合わせた様々な方との交流という言葉に置き換えることができる。そのような言葉であれば、上記の「異なる場所での出会い」というのが達成できるのではないか。現地の小学生や農家の方など、現地の方との交流を大事にしていきたい。そのような言葉であれば、幅が広がるのではないか。

(委員D)

- ・「よりよい人間関係の構築」の例示としての「現地の小学生との交流」という言葉を変えるのであれば、中学生においても「現地の中学生との交流」という言葉についても、

併せて変えてほしい。中学生に限定するのではなくて、様々な年代の方と交流できるよう「現地の方との交流」のような形でそろえてほしい。

(委員長)

- ・「現地の方との交流」のような形でそろえてほしいという意見が出たが、いかがだろうか。

(委員H)

- ・最初にお話したが、この例示では今はやっていない新しいことも書いてある。一つ一つの例示を全部の学校でやれるのか見ていくと、すべて集約してしまって例示として何を示すべきかの議論になってしまう。先ほどの当該学年との交流というのも「現地の方との交流」にすべてつながってってしまうので、その書き分けをどうするかという話になる。

(委員長)

- ・「よりよい人間関係の形成を育む活動」の小学校第5学年の例示として「現地の小学生との交流」があり、「当該学年にふさわしい特色ある活動」の例示にも小学校第4学年で「現地の小学生との交流」があるということも、これでよいのか考えていかないといけない。
- ・次に、第二の柱である中間まとめの検討を行いたい。

(事務局) 説明

- ・「武蔵野市長期宿泊体験活動検討委員会 報告書 中間のまとめ (案)」の説明

(委員長)

- ・中学校の宿泊数について、ご意見をいただきたい。

(委員I)

- ・4泊5日、3泊4日とあるが、今やっている活動のどれにも意味があって、それを考えると現状の4泊5日の方がよいのではないかと個人的には思う。
- ・コロナ禍ではあるが、自校の受け入れ先であるみなかみ町からは来年度実施できそうだとご連絡をいただいている。ただ他の中学では、30軒宿の受け入れをお願いしたところ了承されたのが3軒か4軒くらいで、来年度実施する場合、どのようにやっていけばいいのか課題になっている学校もあると聞く。そうなってくると、相手先の意向も含めて、どのような活動が可能なのか。学校のねらいや思いはあると思うが、相手先が受け入れてくれることなしには進められないと思う。このコロナ禍はずっと続くわけでは

ないが、そういったことも考えて進めていかなければいけない。今までの実施地と変えて少し様子を見る期間がもしかしたら必要になってくるかもしれない。そこで学校差が出てしまうのをよしとするのかどうなのか。

(委員長)

- ・現場の率直な意見をいただいた。その他いかがだろうか。

(委員A)

- ・泊数について、中学校長会でも話をした。4泊5日のままの方がよいという意見と3泊4日にした方がよいのではないかという二つの意見がでた。ただ、今までお世話になっている現地の方がいるので、現地の方のご意見を聞くことが必要だと思う。聞いてみて、変えられるようなところがあれば3泊4日も考えられるが、現地からこれもやってほしいという要望があると、やはり4泊5日になるのかなという意見があった。
- ・先ほど、来年度受け入れ先がなくて4泊5日はちょっと難しいという話があった。その学校についても、来年度は3泊4日になるかもしれないが、その後は4泊5日に戻していきたいと話していた。受け入れ先と相談しながら泊数について今後検討していく必要があると思う。

(委員長)

- ・その他いかがだろうか。

(副委員長)

- ・今までの検討の中で泊数についても検討してきた。この検討委員会の主旨は、今後長期宿泊体験活動をどうしていくべきかということ。例えば中学校第1学年にどのような体験をさせたいか、どのようなねらいを達成させたいかということを考えた上で、何泊必要か。それが、持続可能性も含めて4泊5日必要なのか、3泊でも達成できるのかという話。
- ・コロナ禍という現状はあるが、通常に戻ったときに何泊必要なのか考えていただきたい。現地としては、やらせたいことはたくさんあると思う。ただ、学校として、保護者としてどういうことをさせたいかという観点で話していきたい。

(委員D)

- ・私は現状のままでよいと思う。子どもたちが楽しみにしている長期宿泊というところで、プレセカンドスクールと同じような泊数にしてしまうのは、長期宿泊と言えないのではないか。場所や活動はもちろん変わっていくと思うが、泊数は変えずにゆとりのある形でやってほしい。

(委員 I)

- ・第四中学校は、1泊目がキャンプ泊で夕食朝食が飯盒炊飯。みんなで協力をしながら行う。みなかみ町に実施地を変更したことで、これまで農家泊が1泊だったところをようやく2泊にすることができる。お邪魔するというよりは、その中で生活するという時間が長くなり新しい形が生まれると思う。また、トレッキングも行う場合は、3泊4日で実施するのは難しいと考える。それぞれの意味合いを考えると4泊5日ではないと思う。

(委員 F)

- ・中学校については、「子どもたち自身で考えること」を小学校以上にできるようになるし、していくことが武蔵野市としてよいのではないかと思う。場所は決まっていると思うが、自分たちでどうしたいか。例えば、私は飯山に行くときに山登りをしないといけないとは全然思わない。自然は山だけじゃない。他の委員が先ほど言ったようにほったらかす時間があってもいいと思う。中学校で総合的な学習の時間の一環としての考え方もあるだろうし、その時参加する子どもたちの特性を生かした活動もあると思う。だから、泊数については上限を現状の4泊5日にするのでよいと思う。そのような柔軟な形も考えられないだろうか。

(委員長)

- ・現地に行って教えてくれる方がいる活動もあるが、中学生になると自らが考えてこういうことがやってみたいということを考える時間が必要になってくる。せつかく中学生の発達段階で行くので、挑戦や新たな課題に取り組んでくことも意味があると思う。
- ・その他意見があればお話いただきたい。上限の日数を設けるという意見をいただいた。

(委員 A)

- ・以前中学校セカンドスクールについて、今は総合的な学習の時間で行っており、中学校第1学年は総合的な学習の時間の時数が少ないので、1泊減という話をした。ただ、他の委員も言っていたように学校行事として行く形にしていただけなのであれば、そこはクリアになると思う。

(委員 F)

- ・むしろ中学校については、総合的な学習の時間で組める可能性があるのではないかと。自分たちで交渉してスケジュールをとって子どもたちが行動を決めるというのが、中学生はすごく面白いのではないかと思う。先生は大変だと思うが。ということから、教科でもよいが、総合的な学習の時間でもとれる可能性があると思う。

(委員長)

- ・次に評価について事務局より説明いただきたい。

(事務局) 説明

- ・評価について

(委員長)

- ・評価についてご意見があればいただきたい。

(委員F)

- ・これだけ大きな事業で、市の特色としてやっているものなので、ある程度評価をすることは必要だと感じた。ただ、学校は学校で、個別で評価しているので、なるべくシンプルな形で評価できるとよい。おそらく小・中学校すべてで同じものを使用して評価を行うことになると思う。簡単で少ない設問で、子どもたちも理解しやすい内容で、集計もしやすい形がよいと思う。

(委員長)

- ・その他ご意見はあるだろうか。
- ・市としては統一した形でやるということによいか。

(委員B)

- ・評価の形式をできるだけシンプルにしてほしいというご意見があったが、今後1人1台タブレット型パソコンの配布を予定しているので、それを使って子どもたちがチェックを付けて回答をしてもらう。そうすると集計も一気にできてしまうので、簡素にできるのではないかと想定している。
- ・中間まとめ(案)については、お配りした形でまとめているが、ご意見等をいただきそれを反映させたものを委員の皆様に見ていただいて、確認していただきながら集約してまとめていきたい。情報は随時皆様にご提供していく。

(委員長)

- ・そのような形で進めてよいだろうか。今回細部までは詰め切れていないが、全体については検討していったと思う。

(委員D)

- ・中間まとめ(案)に「本事業については、事前事後のアンケート調査を実施し、長期宿泊体験活動が児童・生徒に及ぼす影響を分析・評価し、結果について、日常の教育活動

や次年度のプログラム作成に反映する。」とあるが、これは児童・生徒に対する教員による評価の中に入っているのか。これが目指す資質・能力を育成するための教員等の働きかけをこういう風にするということであつたら分かるが、その後に「及び評価に関する視点」とあるのが、様々な要素が混ざってしまっている。8ページでは『「教師の働きかけ」について』と「評価について」が別になっているのに、11ページでは一緒になっているので読み取りづらい。できれば、分けた方が分かりやすい。初めて読んだ人が、委員会でこんなことを検討して長期宿泊とはこういうものなのかというのが分かる方がよい。

(委員長)

- ・最終的には市民の皆様に読んでいただいて、理解していただかないとパブリックコメントもいただけないので、分かりやすい形に変えていきたいと思う。
- ・次に、現実的で厳しい課題だが、生活指導員の問題について、みなさんの方でご意見があればお話いただきたい。

(委員G)

- ・確認だが、教育実習に来る学生はセカンドスクールに行っているのか。

(委員F)

- ・声はかけている。

(委員G)

- ・教育実習の内容をセカンドスクールにしてしまうのはどうか。できないことなのか。

(委員C)

- ・教育実習は大学生の授業の一環であるので、謝礼が出ない完全ボランティアになってしまう。

(委員G)

- ・教育実習をセカンドスクールにすれば、セカンドスクールに行けば単位はもらえるということになるのか。

(委員F)

- ・大学が認めないだろう。

(委員C)

- ・教育実習には、将来担任として一人で任せるための能力を3・4週間という限られた中で育てていく責任が学校にもある。生活指導ができるよう、学校運営を理解できるよう、受け入れる学校としても使命を感じている。セカンドスクールは価値があるものだがその重要な使命をセカンドスクールで全うするのは難しいと思う。

(副委員長)

- ・生活指導員を一本釣りするのが難しいと思う。一人ずつ集めるのが、非常に難しい。集団として子どもたちを野外活動に連れて行ってる団体が山ほどある。そういった団体は夏休みを中心に活動しているが、セカンドスクールは若干ずれる。団体として派遣してもらおうのか、その中で声をかけてもらおうのか、やり方は違うとしても団体に声をかけて定置網のような形で生活指導員を確保していくことが必要だと思う。

(委員D)

- ・セカンドスクールもジャンボリーも、きちんと理解している市職員が少ないと感じる。ぜひ市役所の新規職員に関わってもらいたい。また、各学校で集めるというのは大変なので、各学校で働いた方をまとめて名簿にして人材ファイルのようなものを作って共有しようという話が以前からあったが全然動いていない。

(委員B)

- ・もう既にある。私が副校長だったときにも、結局は一本釣りだが、そのファイルを使って他校で勤務経験のある生活指導員に声をかけていた。第四小学校は数少ない春実施だったので、春に行きましょうということで声をかけていた。

(委員D)

- ・それを基にした一本釣りなので、それをどうにかできないか。

(委員C)

- ・名簿はきちんと作っていただいている。ただ、行くのが学生さんなので、すぐに卒業してしまう。また、1週間空けることができる学年というのは限られてくるので、よい人だったから今年もお願いしたいと思ひ声をかけても就職してたりして難しい。

(委員D)

- ・私も小学校の生活指導員集めで関わっているが、経験者に後輩を紹介してとお願いをして、繋いでもらっている。結局そのファイルを使って一本釣りしているので、それを定置網みたいにして団体でごっそり確保できないだろうか。

(委員F)

- ・結局リストだとしても、1本電話すれば5人確保できるようならよいが、結局1本1本電話をかけていくしかない。本校の副校長は来年1月からの産休代替の講師を探している。50件位電話をかけているが見つからない。それは生活指導員でも同じことが言える。私が考えたのは、ハローワークがよいと思った。しかし、いればよいという訳ではない。子どもと一緒にずっといると考えると、そういう分野で経験がある企業などをお願いすることを検討してもらいたい。そうでないと、生活指導員の確保は本当に厳しいと思う。

(副委員長)

- ・団体は社員として働いている訳ではないので、団体として責任を持って派遣いただくのは難しいかもしれない。できたとしても紹介をしてもらい学校で面接をするような形だと思う。

(委員F)

- ・例えば、私が以前勤務した地域では自然大学校という組織があった。そのような安心できる組織に任せるとするのは必要だと思う。

(委員長)

- ・1年2年かけて団体とのつながりを作っていくとそれが続いていく。ジャンボリーのよう市役所内に働きかけることは可能か。

(副委員長)

- ・ジャンボリーは2泊3日くらいで、駐在する職員は募集して行っている。ただ、庁内も非常に人材不足で声をかけることはできるかもしれないが、職員採用もままならないので、厳しいかもしれない。

(委員G)

- ・職員に声をかけることに近いかもしれないが、プレーパークの職員には声をかけているのか。職种的に近いと思う。プレーパークには指導員がいて子どもの遊びを見守っている。

(副委員長)

- ・何人くらい関わっているのか。

(委員G)

- ・日によってばらばら。常駐で5人くらい。頼んだら、「いいよ」と言ってくれそうかなと思った。

(委員D)

- ・プレーパークを手伝っている人達も学生さんや地域の方など様々な方がいるのでまだ声のかかっていない人達もいるかもしれない。様々な団体とつながって、様々なところに声をかけないといけないということ。一番そこが重要かと思う。

(委員F)

- ・ジャンボリーもそうだが、子どもたちは参加して、保護者は送り出す。去年は保護者の方がジャンボリーに来てくださったが、これまではなかったこと。ジャンボリーにしてもセカンドスクールにしても、保護者に呼びかけて対応してもらうとか地域の方に関わってもらってもよいと思う。全部学校でやるのではなく、地域に関わってもらうことを学校としてリードしていかないといけないと思う。

(委員D)

- ・生活指導員になることに年齢制限とかはあるのか。私も地域コーディネーターをやっているので、生活指導員をぜひやらないかと声をかけるが、学校の先生に聞くと「大学生で時間に余裕があつてできれば教育学科の子」がよいと言われる。そうなるものすごく限られてしまう。保護者の方にもこういう人材を集めたいと言えれば、集めやすくなるのではないか。

(副委員長)

- ・実際にセカンドスクールに行ったことがある方に質問だが、たとえば小学校のセカンドスクールは、分宿で先生の目の届かないところにお兄さんお姉さんに行くというイメージだが、先生よりも年上の人間が一つのグループだけ生活指導員として入るのはどうなのか。

(委員B)

- ・それはそれでよいと思う。実際にそのようなことはある。

(委員D)

- ・ありだと思う。それなら私が行きたいくらい。

(委員F)

- ・学校が条件をつけてしまうのは、教育学部で教員志望だったら不測の事態にはなりにく

いだろうという考え。

(委員C)

- ・安心材料ということ。先生の目の届かないところで、ほんとうに預けるわけであるから、それなりに志のある人に預けたい。

(委員D)

- ・こういう人がほしいというのをもう少し分かりやすく地域の方に伝えられないか。例えば青少協でこういう方いませんかと聞くのも手だと思う。また、民生委員は学校とつながりが深いと思うが、そういった方であれば、地域にこういう方がいると分かる。今後のことを考えると少し探し方を広げたほうがよいのかもしれない。

(委員F)

- ・それも一つの方法だと思う。ただそれは一つの方法であって、それで生活指導員の確保の問題が解決するとはとても思えないので、団体をお願いすることも検討していただきたい。

(委員長)

- ・多様な人と関わるという意味では、例えば子育てを経験したお父さんやお母さんもいるだろう。何年かかかると思うが、地域に少しずつ視野を広げてみようというご意見がでた。地域コーディネーターとも相談しながら、少しずつでよいから広げていくことが必要。

(委員B)

- ・報告書の中には、生活指導員とはどういう存在なのか、どういう仕事なのかしっかり書きたい。地域に声をかけていく等様々な方策を列挙する形で考えていきたい。

(委員長)

- ・教師の働きかけという面で、褒めることも大事だが、徹底的に指導しないといけないこともある。就寝時間・集合時間などは徹底して指導する。ただ子どもたちには、叱るだけではなくて、次にはどうするかグループで考えさせ、できたら褒める、というような働きかけをしてほしい。また、地域の方に生活指導員とはどういうものなのか説明していく。
- ・ここまでで意見交換は終了となる。今後について、事務局から説明をお願いしたい。

(事務局)

・次回について